

質の高い 幼児期の教育



目次

発刊にあたって / 4つのサブテーマについて …… 1

コラム

「質の高い学び」につながる幼児期の体験を通した学び …… 2

幼児教育における ICT の活用

- 「新しい生活様式」下での幼児教育での ICT 活用について
北海道教育大学附属函館幼稚園 …… 3
- 対象に思考をめぐらせ、自己を理解するツールとしての ICT
奈良女子大学附属幼稚園 …… 4

言語活動の充実

- 対話的な保育からみる子どもの言語活動
千葉大学教育学部附属幼稚園 …… 5
- 集団教育のダイナミックスを生かした言語活動の充実
鳴門教育大学附属幼稚園 …… 6

探究心の育成

- 幼児と共に探究する保育者
福島大学附属幼稚園 …… 7
- 「遊びにうちこむ子ども」を支える
信州大学教育学部附属幼稚園 …… 8

幼児教育における多様性

- 多様性を受け入れ自ら動き出す子
新潟大学附属幼稚園 …… 9
- 多様性を認め合う保育実践を通して
静岡大学教育学部附属幼稚園 …… 10

令和4年度 全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧 …… 11

令和4年3月

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

発刊にあたって

国立大学附属幼稚園は、これまでに一貫して、義務教育及びその後の教育の確かな基礎となる質の高い幼児期の教育を実践し、研究成果を示してきました。今年度は、実践・研究を通して、あらためて幼児期の教育が小学校以降の学校教育につながる意義や価値を示す視点として、4つのサブテーマを設定しました。

1つめは、「幼児教育における ICT の活用」で、幼児教育に於ける ICT 活用の可能性を探ります。2つめは、「言語活動の充実」と題して、幼稚園生活での言語環境とはいかなるものかについて考えます。3つめは、幼児の探究心への教師の援助のあり方を深めます（「探究心の育成」）。4つめとして、SDGs の視点から「幼児教育の多様性」を考察しています。

リーフレット作成にあたっていただいた各園の先生方に感謝申し上げます。と同時に、このリーフレットが全国の教育・保育関係者のみなさまにとって、何かしらの貢献になればこれ以上の喜びはないと存じます。

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会
部会長 下田 淳

4つのサブテーマについて

幼児教育における ICT の活用

幼児教育ではどのような ICT の活用があるのか、その活用によって幼児はどのような学びをすることができるのかについて、考えを深めています。

➔ P.3～P.4 へどうぞ

言語活動の充実

豊かな言語環境とはどのようなものか、言語活動の充実を幼稚園生活全体の中でどのように考えていったらよいかについて、考えを深めています。

➔ P.5～P.6 へどうぞ

探究心の育成

幼児の探究する姿と、幼児の探究する機会を保障する教師の援助のあり方について、考えを深めています。

➔ P.7～P.8 へどうぞ

幼児教育における多様性

持続可能な社会の創り手となるために、「SDGs」の視点から、どのような保育が求められるのかについて、考えを深めています。

➔ P.9～P.10 へどうぞ

「質の高い学び」につながる 幼児期の体験を通じた学び

國學院大學名誉教授／大阪総合保育大学・大学院特任教授

神長 美津子

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(2021年1月)では、新しい時代を見据えた学校教育として、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない個別最適な学びの実現と、その学びを支えるための質の高い教育活動を実施可能とする環境の整備の必要性を提言しています。

「個別最適な学び」は、教師の視点から整理した「個に応じた指導」を学習者の視点で整理したものです。ICTの活用により「指導の個別化」と「学習の個性化」を図り、「個別最適な学び」を実現していきます。ただし、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じて「協働的な学び」を充実することも重視しています。一人一人のよさや可能性を生かしつつ、異なる考え方が組み合わせることでよりよい学びを生み出すことを期待しています。答申を踏まえ、2021年5月に「幼児教育スタートプラン」が示され、全ての5歳児に質の高い幼児期の教育を保障し、格差なく学びや生活の基盤を育むことの重要性が提案されました。

幼児は周囲の環境と主体的に関わり、体験を通して生きる世界の様々なことを学んでいます。しかし、こうした幼児期の教育の意義や教育的効果は、必ずしも十分に理解されているわけではありません。学校教育において全ての子供たちに質の高い学びを保障していくためには、その基盤をつくる幼児期の教育での学びと、学校教育全体で重視する学びを繋げていくことが必要です。

サブテーマとして挙げている4つの視点は、学校教育で重視する資質・能力を見据えて、その基盤づくりとしての幼児期の教育の在り方を検討するものです。第一の視点は、幼児教育におけるICTの活用です。幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、ICT等の特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的・具体的な体験をさらに豊かにする工夫したICT活用を論じています。第二は、言語活動の充実です。幼児期の終わりに近づくと直感的理解から言語的理解へと移行していくと言われていきます。その始まりは体験した気付きを言葉にする試みであり、こうした視点から言語活動の充実を論じています。第三は、探究心の育成です。協働的な学びでは、探究的な学びや体験活動が一層重視されるので、その基盤として、幼児教育で育成することを論じています。第四は、多様な他者との学び合いを実現するために、幼児教育における多様性を論じています。

質の高い幼児期の教育を実現していくためには、保育者一人一人の資質向上を図り、「幼児が体験し学んでいること」に対する共感的理解と、その学びを深めていく実践力を磨いていくことが重要です。今後、全国の附属幼稚園において、質の高い幼児期の教育の展開することを期待しています。

「新しい生活様式」下での幼児教育での ICT 活用について

はじめに

本園では、2009(平成21)年の園内での有線 LAN 及び無線 LAN の整備に始まり、ICT の環境の整備を開始し、現在、タブレット型 PC については1クラス(25台)分の整備完了。園敷地内では園庭・テラスを含め全面で無線 LAN が整備されている環境にある。新型コロナウイルス感染症蔓延予防のための「新しい生活様式」下での、幼児教育における題材開発・指導理論の開発と検証・発信の一つとして、本園で進めてきた ICT の導入・推進する過程での成果と課題等についてまとめた。

ICT の導入に当たって

1. 教育研究に関する承諾書



2. 保護者アンケート



3. ICT 環境整備

- WiFi 環境の整備
- タブレット型 PC の整備
- 仕様規約の検討作成
- 研修計画の検討作成
- (場合によっては外部機関との連携)

など

保育実践事例

1. Zoom による外部講師の招聘

外部講師と幼稚園との双方向保育を行った。過去に直接保育を受けている講師をテレビ越しに見ることで園児たちはテレビの出演者として興味深く視聴し積極的に参加していた。



外部講師のお話を聞きながら取り組む園児

2. YouTube による行事の配信

園の日常や行事などを撮影し、YouTube にアップロードし、限定公開・ダウンロード不可で配信を定期的に行った。遠方の家族も視聴できると好評であった。



3. 園内配信による行事の見直し

全園児を一箇所に集めての行事を、それぞれの保育室と遊戯室とをリモートで繋ぐことにより、大人数が一箇所に集まることなく、分散型少人数で実施することができており、できる行事が広がった。



まとめ

幼児保育の基本は実体験であることに変わりはないと考える。しかし、ソーシャルディスタンスの確保や三密を避けるなど新しい生活様式下では、これまで園児が実体験してきたことを継続することは難しく、実体験の機会が必然的に減少せざるを得ない。そのような状況下において ICT を活用することにより、実体験を補う一手段として取り入れることにより、新たな保育の形態を開発することができるのではないだろうか。著作権や肖像権等の課題は残されているが、保育の質を維持・向上させるための保育手段の一つとして取り上げてよいのではないかと考える。

北海道教育大学附属函館幼稚園 〒041-0806 北海道函館市美原3丁目48-6

電話：0138-46-2237 FAX：0138-47-8731 Eメール：hak-fuyou@h.hokkyodai.ac.jp

対象に思考をめぐらせ、 自己を理解するツールとしての ICT

これからの学校教育を支える基盤的なツールとして、ICT はもはや必要不可欠なものである。中でも幼児教育においては「幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、ICT 等の特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的・具体的な体験を更に豊かにするための工夫をしながら活用する」ことが求められている。(文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申))

そこで本提案では、探究・表現のツールとしての ICT 活用事例において、子どもが対象に思考をめぐらせ、自己を理解していった子どもの学びについて考察する。

事例 1



小1

どうして自分はこの写真で切り取った場所が「お庭」だと思うのだろうか。A児は自分で撮影した左下の写真を繰り返し眺めた。そして活動を重ねる中でついに気づいたのは、
「おにわは自ぜんがあつて、おにわは、リレーで一番になつて、すながすきになつたから。」だった。A児は、幼稚園時代に繰り返し友達と一緒にリレーに取り組み、そこで泣いたり笑ったりした経験が自分の「お庭」の概念を形成していたことに、写真や異年齢の友達との対話の中で気づいていった。

どうしてそこが「お庭」だと思ふのか？ —異年齢探究活動(5歳児/小1/小2)

何度築山の写真を自分で撮影しても納得いかないB児。ついに「僕はこれが好きなの！」と言って築山を転がった。B児にとってはただ築山が「お庭」なのではなく、そこを転がり落ちる楽しさのイメージもセットで「お庭」であり、この表現が「お庭」を探究した証だった。



5歳児

年齢で優劣がつかず、教師も答えをもたない「お庭」というコンセプトを探究する中で、子ども達は写真というメディアを通して対象に思考をめぐらせ、自己理解を深めていった。また異質な他者である異年齢の友達との対話は、写真を見る人の経験によって写真の捉えが異なるという写真の開放性をより活かすこととなった。

事例 2

「自分の好きな場所をおうちの人に見せてあげたい！」という子どもの思いから立ち上がったプロジェクト「すきなところどーこだ?」。幼稚園に入ることでできないおうちの人に向けて、自分の好きな場所を自分で iPad で撮影し、自分の言葉で語る子どもの声を編集し、動画にして家庭に配信した。(T:教師 C/D:子ども)

T: Cさんの好きな場所を教えてください。
C: この、おすなが、ぜんぶあるから、みんなであそべるのがたのしいから。
T: そう! 教えてくれてありがとう。



自分にとっての「幼稚園」を表現する —「すきなところどーこだ?」(3歳児)

T: Dさんの好きな場所、教えてください。
D: おやまです。
T: なんでおやま、好きなの?
D: 登りたいからです。
T: そっか! 教えてくれてありがとう。



C児は、3歳児専用ではなく、全園児共用の砂場を選び、「みんなで遊べる」ことの喜びを表現している。そして、入園してしばらくは緊張から教師の傍を離れられなかったD児は、今は自分で行きたい場所に行ける喜びを、築山に実際に登った自分の足元を撮影していることで表している。ICTを活用することにより、一人一人の子どもが園を自分の居場所としていること、園での経験や思いがメタファーとして写真と言葉で表現されていることがわかる。

教材としての ICT

両事例では、子どもの豊かな表現を豊かなまま対話につながる道具として ICT を活用したことで、子ども自身の自己理解も深まっていった。両事例を支えているのは、以下の2点である。

- 子どもと大人が対称な関係であるように互いを尊重すること。「子どもスタートの教育」におけるカリキュラム・マネジメントにより子どもも教師もともに主権者であるというマインドセットを育むことを意識すること。
- 写真というメディアは撮影する時点においてすでにひとまとまりの意味を含むということなど、ICTの特性(教材性)を意識した上でツールとして活用すること。(詳細は <http://www.nara-wu.ac.jp/crades/journal.html> に掲載)

奈良女子大学附属幼稚園 〒631-0036 奈良県奈良市学園北1-16-14

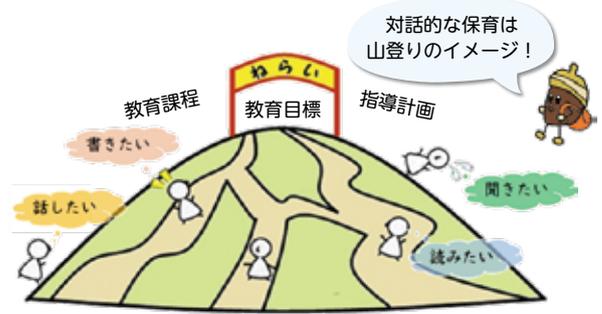
電話：0742-45-7261 FAX：0742-40-2161 Eメール：fuyo-admin@cc.nara-wu.ac.jp

対話的な保育からみる子どもの言語活動

本園では「子どもの言語活動」を、言語的な技能・技術の習得や熟達を目指した特定の活動ではなく、ねらいに向かうさまざまな遊びや活動の中に含まれている言語的な側面と、その活動の結果として付随してくる技能・技術の熟達であると考えた。

対話的な保育においては、教育目標（本園では「うごく」「かんじる」「かんがえる」）や指導計画上のねらいに向かう遊びや活動は、あらかじめ詳細に計画されるものではない。その時々子どもと保育者とで自由に選択していく保育をするために、以下の3点を援助の方向性としている。

対等な関係である	興味・関心を共有している	対話をしながら決めていく
幼児同士 幼児と教師が	その場の構成員で	教師が一方向的に活動の道筋やゴールを決めない



※千葉大学教育学部附属幼稚園 令和2年度研究紀要より

対話的な保育の事例から言語活動を考える！

3歳児Ⅰ期

教育目標	うごく	かんじる	かんがえる
期のねらい	幼稚園に安心感をもってすごす	教師に親しみをもつ	園生活の中で好きなものを見つける

A児は不安感が強く、入園当初から泣くことが多かった。言葉を発することはほとんどなく、担任の問いかけに首振りのみで答えることが続いていた。ある日、担任はA児と一緒に森に向かった。森の中では、数人の子どもがミズ探しをしており、そこに担任とA児も合流。担任が「いつもはどこを探しているの?」と問いかけると、周囲の子どもが口々に様々な場所を答える。A児も「こっち探してるの」と小さく答えた。担任はA児からの返答に対し嬉しい気持ちがあったが、これまでのA児の姿や性格を踏まえ、大げさに反応を返すとまた話さなくなってしまうのではないかと考え、あえて他の子どもに対するのと同様に「そうなんだ。みんないつも探検しているものね」と答えた。近くにいたB児はA児を指さし、「この子もいつも一緒にいるよ!」と言う。A児はB児を見てうなずく。

5歳児Ⅲ期

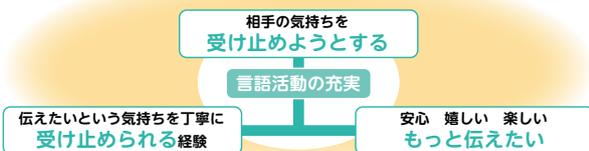
教育目標	うごく	かんじる	かんがえる
期のねらい	共通のめあてに向かう中で、クラスや学年の友達と体を動かして遊ぶことを楽しむ	友達と一緒に遊びや生活を進める中で、自分のよさや友達のよさに気付く	いろいろな友達の考えにふれて、自分なりの考えを深める

クラス対抗リレーの結果は2レースとも空組の負け。保育室に戻る途中、子どもたちは「Cちゃんが、靴が脱げちゃったから、抜かされて負けちゃった」「Dくんが、逆に走ってた」「Dくん、なんで逆に走っちゃったの?」などと口々に言う。このままお弁当になればリレーの話題で持ちきりとなり、C児やD児にとって辛いだろうと考えた担任は、急きょ作戦会議を提案した。まず担任が「今日のリレーは負けちゃったけど…」と話すと、「そう!だってCちゃんの靴が脱げちゃったから!」C児「靴のペリペリがくっつかなかったんだもん」。「それから、Dくんが逆に走っちゃった」「ねえ、Dくんはなんで逆に走っちゃったのさ、D児「…」。そこで担任は、「なんで負けちゃったのか」も大事だけど、「どうしたら次勝てるのか」を一緒に考えたいんだけど…」と話をする。すると子どもたちは「靴をしっかりと履く」「腕を振る」「足をあげる」「足を速く動かす」「地面を蹴る」「背筋を伸ばす」「走る場所を間違えない」などの意見を挙げはじめた。担任はそれを聞き取り、ホワイトボードに記入した。

まとめ

まだ言語による表現が得意ではない小さな子どもにとって、うまく言葉にできなくても相手が丁寧に受け止めてくれたという経験は、次の『もっと伝えたい』という気持ちにつながっていく(3歳児事例)。そうした経験を重ねた子どもは、別の場面で相手の気持ちや言葉を受け止めようとするだろう。伝えることと受け止めることを繰り返す中で、子どもは自分の内にたくさんの言葉を積み重ねていき、次第に自分の言葉として活用していくようになる(5歳児事例)。このサイクルが言語活動の充実のひとつであると考えられる。

遊びや生活の充実



左の図に示したように、言語活動は子どもの遊びや生活の一部である。したがって、言語活動それだけを取り上げて指導しようとしたり、充実させようとしたりするものではない。保育者が子どもの言葉・表現を丁寧に受け止めることは何よりも遊びや生活の充実のためである。そのことが、ひいては言語活動の充実につながっていく。

集団教育のダイナミクスを生かした 言語活動の充実

学習指導要領において「言語活動の充実」の重要性や必要性が提起されたことは意義深い。児童期の言語活動は、乳幼児期に獲得された言語活動を基盤にして充実していくものであると考えられることから、幼児が言葉に触れ、言葉を獲得できるような豊かな言語環境やその充実が、私たち幼児期の教育の専門家としての使命となる。本園の科学的思考力の評価要素からのアプローチを紹介したい。

U 児 4 歳と年長児たち 10 月の事例

「おなかですいてかわいそうよ」

園外保育で4歳児のU児はカナヘビを捕まえた。「きれいな色でしょう。うわあ。かわいい。私、幼稚園につれて帰りたい。私のお友達にするの」と、芋掘りそっちのけでカナヘビを友達に見せたり手の上をわさわさしている。



やがて彼女の周りに人だかりができた。「やめろよ。バッタがかわいそうだよ」とR児。「この子（カナヘビ）だつて、おなかですいてかわいそうよ」U児が反論する。「このバッタは、もう死んでいるから、いいんじゃないの」S児が応援する。

傍から年長児が保育者にも投げかけるように「でもな。幼稚園に連れて帰って、飼うって言うことは、ずっと虫や動物を餌にすることになるんだぞ」という。保育者は頷きながら議論を聞いている。

「カメの餌ではいけないの」とS児が提案する。「わたし、死んだ

虫とかカメの餌あげるから…」U児も言うが、なお年長児は「勝手に連れていくのはいかん。ここで好きにさせておいてやれよ」とたしなめる。

「先生…」とU児が意見を求めてくる。

「ぼくはいつも悩むんだ。今日のお芋も畑から掘って帰るしな。魚釣りするときはエビやゴカイを針にさして餌にするし、釣った魚も食べるし。うーん。悩むよなあ。できるだけ無駄にとったりしないようにはしているし、頂いた命は『いただきます』って大事に食べてるけど、うーん。難しい…悩むなあ」

そうしているうちに、U児はカナヘビを草むらに離れた。「わたしもまた、遊びに来てあげるって、お話したの」U児は手を振っている。「Uちゃんは、カナヘビの気持ちもわかるんですか?」と保育者が聞くと、「うん『連れて行って』って言ってなかったもん。まだ子どもだったのかなあ」と首をかしげて笑っている。

考察「何が育っているか?」

4歳時期になると、会話的行動が著しく発展し文構造も複雑化し、文脈に応じての語の選択も行われたりするなど、様々な表現が自由になってくる。また、自己のこばによる行動調整機能も発達してくる。

自己の発声に伴って、その行動を引き起こすことができるようになってくる。しかしながら、こばによるセルフコントロールはまだまだ難しいところもある。

4歳児U児の場合は周囲の年長児たちとのやりとりの中で、自分なりの意味づけを加えてカナヘビを放してやるという行動の抑制をしている。しかも、自分の文脈の中で自分の過去、現在、未来を明確に区分し、一連の出来事を時間的に順序立てて物語っていることがわかる。

幼児の探究心・思考力を刺激し、 言語活動を活性化させるポイント

・比較して考える

「この子だつておなかですいてかわいそうよ」

・関連させて考える

「カメのえさではいけないの?」

・検討して考える

「Uちゃんは、カナヘビの気持ちもわかるんですか?」と保育者が聞くと、「うん、『連れて行って』って言ってなかったもん。まだ子どもだったのかなあ」



これからの活動の中で、気づく・感じる・考える・かかわる・行動することを活性化させていく

幼稚園から小学校への接続期に、幼児の姿から自らの保育実践や幼児理解を評価し、改善していく視点として次のような評価要素表を作成している。(一部抜粋)

科学的思考を促す幼小接続教育課程の評価要素表 —鳴門教育大学附属幼稚園方式—

A 発見と問題解決



①好奇心・試行錯誤

- 美しいものや不思議なもの、未知のものなどに驚嘆したり、関心をもってかかわったりしようとする。
- 多様なものにかかわって、周囲の子どもたちや大人にたずねたり、自分で調べたり試したりしながら、試行錯誤する過程を楽しみ、そのものの特性に気付いたりする。
- 発見した喜びを味わったり、人に伝えたりして、意欲的に表現しようとする。
- 「なぜ、どうして」などと想像したり、自分のイメージで新しいものをつくり出そうとしたりする。

②論理的に理由付けされた行動

- 季節や天候にあわせて服や道具を使いこなす。(帽子・手袋・上着・雨傘など)
- 使った道具や用具を片付けるとき、正しい場所に置く。
- 遊びに必要なものをそれぞれの置き場所から取る。
- 最初と最後の様子や過去と現在の状態から、つながりや因果関係を考えてり予測したりする。
- 自然に触れる中で、ものの仕組みや法則に気付く。

B 言葉への関心

①話すこと・聞くこと

- 人の話や絵本・図鑑、テレビや新聞などの情報から、自分の周りの出来事に関心をもつ。
- うなずいたり相づちを打ったりしながら相手の話を聞き、「なるほど」と納得したりする。
- 主述をはっきりさせて自分の意見を言う。
- 出来事やものの特徴を、かかっているものやことと結びつけながら、自分の言葉で説明する。
- 比喩や例を用いて話したり説明したりする。
- しりとり遊びやなぞなぞ遊び、カルタ遊びを楽しむ。
- 好きな絵本がいくつかあり、その内容について意欲的に話そうとする。
- 絵本を読んだ後やその日のミーティングなど、話し合いに参加する。
- トラブルが発生したとき、その理由を言葉で説明しようとする。

②書くこと

- 書いてあることに注意を向けたり関心を示したりする。
- 自分の名前が分かり、平仮名で書ける。
- 書きたいと思い、文字や表示(ロゴ)などを見ながらまねて書く。
- 友達と一緒に、絵本や表現して遊べるものをつくったりすることを楽しむ。(手紙・看板・メニュー・標識・切符・券・名札・カードなど)

幼児と共に探究する保育者

幼児は、幼児を取り巻く環境と関わりながら、探究する姿(問いや気づきをもつ、試す、もっと知ろうとする等の姿)を見せている。保育者はその姿を捉え、適切な援助ができているだろうか？

**探究する
幼児の姿**

- この草は食べられるのかな？
- 何だろう？
- 種かな？
- この黒い虫は何？
- アブラムシのお引越し大作戦だ！
- アオムシはどの葉っぱを食べるのか実験してみよう
- どんな味？

事例検討等を通して、保育者の悩み、迷い、別の角度からの見方や考え方、改善点を明らかにしたことで、次のような『保育者の援助のあり方』が見えてきた。

保育者の援助のあり方

幼児の問いや気づきを捉える

- ・ 幼児が何に興味をもっているか、何を知りたいと思っているかを探る
- ・ その子なりの考えについて聞き出し、語り合う



幼児と共に 試行錯誤する

- ・ 先走って答えを教えたり、答えに誘導したりしない
- ・ 調べたり試したりするための環境を用意する
- ・ 探究する楽しさを幼児と共感する



友達や保護者に 認められる機会を作る

- ・ 自分の考えを話したり、友達のことを聞いたりする機会を作る
- ・ 掲示物やホームページで、幼児が探究する姿を、保護者等に発信する

福島大学附属幼稚園 〒960-8107 福島県福島市浜田町12-39

電話：024-534-7962 FAX：024-534-7972 Eメール：youchien@aki.fukushima-u.ac.jp

「遊びにうちこむ子ども」を支える

本園では、自ら遊びにうちこむ中で、幼児期にふさわしい様々な体験をし、心身ともにたくましく育っていくことを願っている。そして、「遊びにうちこむ子ども」を支えるために、子どもの内面理解の研究を積み重ね、保育実践に直結させている。その子の「今、まさに育とうとしているところ」を見極め、適切な援助ができるように、カンファレンスにより、日々の子どもの状況把握と、それに対する環境構成や援助の方法を話し合い、保育を実践している。子どもの思いをつぶさに捉え、遊びにうちこむ姿を支えるための援助（環境構成・直接的な援助）について検討した。

子どもの思い、姿をつぶさに捉えるために、私たちには何ができるのか

複数の目で子どもの思いを捉えて
いく1時間の研究保育(年10回)



研究保育では、幼小中の教諭が参加し、より多くの目で捉えていく



子どもの姿を語り、思いを探る
日々のカンファレンス(毎日)



研究保育で得られた視点を生かし、担任、副担任でおこなう



思いをもって 「遊びにうちこむ子ども」



環境構成について学び考える、
環境カンファレンス(週1回)

各学級の担任、副担任が集まって、環境構成と子どもの姿について語り合う



これらの継続で、長期的な視点で子どもの変容を捉える

令和3年度研究の重点 「やりたい」を支える環境構成のあり方

子どもの遊びの姿から日々の環境を整える

- ① ものや人に関わり始める姿、関わる姿を記録する。
- ② その姿から、その子の思いを探る。
- ③ ①②を繰り返す、その子どもが感じているであろう「やりたい」から環境構成を検討、再構成する。
- ④ 環境構成が「やりたい」を支えることにつながったかを考察し、次の援助にいかしていく。

信州大学教育学部附属幼稚園 〒390-0871 長野県松本市桐1-3-1
電話：0263-37-2214 FAX：0263-37-2215 Eメール：fyotien@shinshu-u.ac.jp

多様性を受け入れ自ら動き出す子

当園では、自ら動き出す子供を目指して、子供が対象とたっぴりかかわることを大切にし、その中で生まれた気付きから願いをもち、その実現に向けて自ら考え行動できるように援助をしている。この過程の中で、かかわる対象や方法などかかわりの幅を広げ、さらに多様なつながりをもつことで、他者との違いを受け入れ、新たな価値観にふれることの良さに気付き、願いをもって行動を起こしていくと考えた。このような遊びを充実させることが、グローバルコンピテンシーの基礎の育成につながる。

自ら動き出す子



多様性を受け入れる中で、共通点や相違点など新たな価値の良さに気付き願いを実現するために行動する

つながりプロジェクト

- 1 異年齢とのつながりプロジェクト：縦割り班活動を通して交流遊び・行事の実施
- 2 異校種とのつながりプロジェクト：幼小中合同の行事や児童会行事、授業での交流や、幼小接続の交流活動
- 3 他園とのつながりプロジェクト：他市の2園とオンライン運動会を実施
- 4 世界とのつながりプロジェクト：地域の高校に通っている留学生と交流

実践例

他園とのつながりプロジェクト：オンライン運動会

つながり → 気付き → 願い → 行動

- つながり: [みんなでがんばろう]
- 気付き: [いろいろな園があるね]
- 願い: [友達になりたいな]
- 行動: [手紙を書こう]

世界とのつながりプロジェクト：留学生との交流

つながり → 気付き → 願い → 行動

- つながり: [バスケットボール楽しいな]
- 気付き: [日本とちがうね]
- 願い: [世界のこと知りたいな] [仲良くなりしたいな]
- 行動: [似顔絵だよ] [バスケに挑戦] [英語知ってるよ]

新潟大学附属幼稚園 〒940-8530 新潟県長岡市学校町1-1-1
 電話：0258-32-4192 FAX：0258-37-3705 Eメール：kinder@nagaoka.ed.niigata-u.ac.jp

多様性を認め合う保育実践を通して

本園では、「主体的な生活を創造する子—自発・自律・協同—」を教育目標とし、子どもが自ら遊びや生活を進めていく中で生まれた課題を自分ごととして捉え、課題解決のために思考を働かせたり、他者と協力したりすることを大切にしている。

5歳児11月：「すなばいけ」をつくろう！」

きっかけ



PTAによるビオトープ(どんぐり池)が完成⇒僕たちも同じように作りたい!(子どもの思い)

①穴を掘る

本物らしく再現



まずは大きな穴を掘ろう

それなら力もちのF君を呼ぼうか。

いや、先に池づくりからだよ!

②池をつくる



まずは橋から作ろうよ

思いがぶつかる

③橋をつくる

考えを伝えあったり、相談したりする

この板だと薄くて渡ると折れそう。

板を重ねて釘で打つのはどう?



それいいね!

④水を溜める

思いを実現するために調べる

水がすぐなくなっちゃう!



ぼく調査に行ってくる!

何かシートがあるぞ!

園長室にどんぐり池を作ったときの写真があったような…!

2つのシートがあるんだ



担任

⑤お披露目会

最後までやり遂げた喜びを感じる

すなばいけの完成だ!

赤組(年少)さんどうぞ!



多様性を認め合うことは、互いを価値ある存在として認め、尊重することであり、これにより他者と協力して最後までやり遂げる行動力に繋がった。この経験が土台となり、子どもが身近な問題を自分ごととして受け止め、周囲の人たちと共に考え、協働していくことに繋がると考える。

令和4年度 全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧

令和4年2月現在

園名	令和4年度研究テーマ	公開研究会等の期日
1 北海道教育大学 附属旭川幼稚園	質の高い保育の探求 ～幼児期にふさわしい遊びと生活のデザイン～	8.27(土) 研究大会
2 北海道教育大学 附属函館幼稚園	幼児期からの学びの基盤づくり ～質の高い学びへの円滑な接続のために～(仮)	未定
3 弘前大学教育学部 附属幼稚園	遊びこむ子どもを育む保育	なし
4 岩手大学教育学部 附属幼稚園	豊かな遊びを育む ～対話を通して～	11. 5(土)
5 宮城教育大学 附属幼稚園	園庭で ESD ～子どもが夢中になって遊ぶ教育課程～	10.25(火)
6 秋田大学教育文化学部 附属幼稚園	遊びの中で育つかかわり ～かかわりにおける個と集団～(2年次)	6.22(水) 11. 9(水)
7 山形大学 附属幼稚園	遊びこむ子どもを育む	6.9(木)
8 福島大学 附属幼稚園	学び続ける保育者をめざして ～幼児期の遊びを考える～	11.11(金) 11.12(土)
9 茨城大学教育学部 附属幼稚園	地域素材を活かした幼児の学び ～ ICT の活用を通して～(仮)	2.10(金)
10 宇都宮大学共同教育学部 附属幼稚園	遊びって学び ～やり遂げようとする力から見える教育課程～	6.11(土)
11 群馬大学共同教育学部 附属幼稚園	夢中になって遊ぶ幼児を育む保育 ～遊びの魅力を膨らませる環境の再構成～	11. 5(土)
12 埼玉大学教育学部 附属幼稚園	ふぞくようちえん90周年 育ちをつなぐプロジェクト	6.16(木) 11. 2(水) 1.25(水)
13 千葉大学教育学部 附属幼稚園	対話からうまれる保育と評価	7. 9(土) 2.18(土)
14 東京学芸大学 附属幼稚園小金井園舎 東京学芸大学 附属幼稚園竹早園舎	幼児の学びを支える人との かかわりを再考する～2年次 未来の学校 みんなで創ろう。PROJECT	未定 未定
15 お茶の水女子大学 附属幼稚園	幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園 の教育課程(3歳児～5歳児)の編成及び保育 の実際とその評価の在り方についての研究開 発(4年次)	2.10(金)
16 山梨大学教育学部 附属幼稚園	しなやかに伸びていく子どもを育む保育	12. 3(土)
17 新潟大学 附属幼稚園	自ら動き出す子どもの育成(2年次)	4.28(木) 10. 8(土) 12. 7(水)
18 富山大学人間発達科学部 附属幼稚園	豊かな感性と表現する力を育む ～もの、ひと、こととの関わりの中で～	6.16(木)
19 金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属幼稚園	幼児期における社会情動的スキルの発達(3 年次) ～「探究心」を育む環境の構成と教師の援助～	11.12(土)
20 福井大学教育学部 附属幼稚園	つながりが育む学びの深まり	11. 2(水)
21 信州大学教育学部 附属幼稚園	【附属松本3校園合同】未来を拓く学校づくり (研究開発学校・2年次)	10月下旬 幼小中合同開催
22 上越教育大学 附属幼稚園	子どもを支える保育(4年次)	9.14(水) 公開保育 9.30(金) 研究会
23 静岡大学教育学部 附属幼稚園	あそびについて語り合おう ～ ICT 機器を利用した保育の記録を手がかりに～	6.15(水) 9.21(水) 11.16(水)
24 愛知教育大学 附属幼稚園	「あれ?」「そうだ!」「やってみよう」 学びがつながる園生活<2・3年次>	11. 2(水) 公開保育・保育 を語る会
25 三重大学教育学部 附属幼稚園	ひととの対話が深まる保育環境 ～遊び込む姿を目指して～	11.12(土)
26 滋賀大学教育学部 附属幼稚園	“いま”を生きる×“これから”を生きぬく力を 育む保育 ～多様なステキと向かい合う子供たち～	未定

園名	令和4年度研究テーマ	公開研究会等の期日
27 京都教育大学 附属幼稚園	幼児の生活と情報活動 ～幼児の遊びを豊かにする ICT 活用の試み③～	12.10(土)
28 大阪教育大学 附属幼稚園	自分のよさや可能性に気付く保育の在り方を 探る	11. 5(土)
29 兵庫教育大学 附属幼稚園	幼稚園における STEAM 教育のあり方(仮)	12. 3(土)
30 神戸大学 附属幼稚園	遊びの中の学びを見取る	6.11(土)
31 奈良教育大学 附属幼稚園	共に創る保育 ～持続可能な社会の担い手を育む教育課程の 編成～	11.11(金) 12.13(火) 1.20(金)
32 奈良女子大学 附属幼稚園	幼児教育におけるカリキュラム・マネジメント ～対話し省察することですつなぐ実践・記録・ 研修・会議・社会～	6.24(金) 10.28(金) 11. 6(水) 公開保育研修会 2.24～3.3 オンデマンド 研究報告
33 鳥取大学 附属幼稚園	未定	10.22(土)
34 島根大学教育学部 附属幼稚園	遊び込む子どもを育てる	11.10(木)
35 岡山大学教育学部 附属幼稚園	未定	11.12(土)
36 広島大学 附属幼稚園	心を動かす子どもたちと援助する保育者(2 年次)	11. 2(水)
37 広島大学 附属三原幼稚園	【研究開発課題】高度に競争的でグローバル化 された多様性社会に適応するために求められる、 3つの次元(躍動する感性・レジリエンス・ 横断的な知識)の基礎となる資質・能力を育 成する幼小中一貫教育カリキュラムの研究開 発(最終年次)	12. 3(土)
38 山口大学教育学部 附属幼稚園	「対象・他者・自己と向き合う子どもの姿」を 視点とした保育・授業づくり(仮:幼小中合 同テーマ)	11.25(金) 幼小中合同開催
39 鳴門教育大学 附属幼稚園	遊誘財研究をいかした「質」向上への挑戦Ⅱ ～幼児期に必要な原体験の充実～	10.15(土) 現地開催とオンラ イン(ライブ配信) 併用
40 香川大学教育学部 附属幼稚園	保育を楽しむ保育者をめざして(仮称)	1.27(金)
40 香川大学教育学部 附属幼稚園高松園舎	園内環境の在り方について考える(仮称)	2. 2(木) 2. 3(金)
41 愛媛大学教育学部 附属幼稚園	未定	2. 3(金)
42 高知大学教育学部 附属幼稚園	未定	1.21(土)
43 福岡教育大学 附属幼稚園	幼児期における環境教育を探る ～副主題(未定)～	10.29(土)
44 佐賀大学教育学部 附属幼稚園	遊びや友達の中で育まれる力	2.12(日)
45 長崎大学教育学部 附属幼稚園	「したい 知りたい やってみよう」を育む 環境構成と教師の援助	10.22(土)
46 熊本大学教育学部 附属幼稚園	「やってみよう」のその先へ ～「学びを支えるポイント」の検証～	1.28(土)
47 大分大学教育学部 附属幼稚園	遊びや生活の中で深く学ぶ子どもを育む (2年次)	1.28(土)
48 宮崎大学教育学部 附属幼稚園	遊びの中の学びを支える環境の構成と援助	2. 3(金)
49 鹿児島大学教育学部 附属幼稚園	保育の質の向上につながる カリキュラム・マネジメント (3年次:教育課程編成)	11.18(金)

発行

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

事務局

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園
〒320-8538 栃木県宇都宮市松原1-7-38
TEL : 028-622-9051 FAX : 028-625-8016
E-mail : fuyo@cc.utsunomiya-u.ac.jp